



戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語

—「用語編」その5

原田 広（非文字資料研究センター 研究協力者）

はじめに

前号『ニューズレター』No.36（連載第4回）では、大政翼賛会や新聞社等の募集によって大量につくられた戦意高揚標語・プロパガンダ用語の紙芝居脚本における使用例を紹介した。具体的には、紙芝居脚本の基礎データ[22/標語]から《旧体制》〈時局〉《滅私奉公》〈一億一心〉〈贅沢は敵だ〉《非国民》などを取り上げ、連載第3回で紹介した国内政治に係る諸用語—〈高度国防国家〉〈総力戦〉〈総動員〉〈新体制〉〈大政翼賛会〉〈翼賛選挙〉〈国難〉とともに、戦時下の言論・メディアを覆った主要な国策用語をとおして、「戦時下の国内社会の精神的様相」を解明しようとしたものである。

今号では、「現実の社会関係を構成する組織や活動」を表した用語を対象とすることによって、戦時下の国内社会・国民生活の姿にアプローチしていきたい。紙面の制約もあるため、本稿の用語分類—[国内社会]の[17/生産・食料・資源、18/交通・通信、メディア、19/教育、20/銃後生活、銃後団体、21/動員・奉仕・生活改善、23/防諜、防空]の6つの括りを今号と次号の2回に分け、各分類項目の上位頻出語を中心に取り上げることとする。

紙芝居脚本の頻出用語から伺える全体的特色については、本稿連載の第1回目（『ニューズレター』No.33、末尾に頻出語一覧を掲載）に、次のように述べたことがある。—「（この頻出語の組み合わせから）戦時下紙芝居の脚本の底流にある基本的なストーリー性をうかがうことができる。①〈銃後〉〈母〉（国内社会）と〈戦地〉にある〈出征〉兵士（父・〈兄〉など）とを結ぶほとんど唯一の手段が〈手紙〉であったこと。②〈支那事変〉以降〈大東亜共栄圏〉の理念を掲げ〈皇国の興亡〉を賭けた〈米・英〉との〈大東亜戦争〉において〈日の丸〉に象徴される天皇の軍隊〈皇軍〉が多くの〈戦死者〉を生むことが日常化した社会であったこと。③その戦争体制を支える〈工場〉での生産強化・勤労働員、戦時財政を支える〈貯金報国〉をはじめとした国への〈奉公〉運動が展開されたこと。このような頻出語が、大衆のメディアとして流通する紙芝居脚本家の創作意識にかなり一般的に反映した時局認識であったであろうことは疑いないが、例えば〈銃後〉と〈戦地〉の対語的・機会主義的な使用などが際立って目につくこともまた否定できない。（中略）その他の頻出語についても同様のことがいえるかもしれない」と。今号以降で紹介する[国内社

会]の分類括りは、この「戦時下紙芝居の基本ストーリー」のうち、①銃後と戦地をつなぐアイテムであった手紙、および③戦争体制を支える勤労働員・奉公運動という主題に該当するということになる。連載初期の直感的な印象を記した後段の下りを如何に展開できるかも課題となる。政治・外交（その延長である戦争）やイデオロギー（その世俗的形態としての戦意高揚標語）を表現する言葉の強烈な影響下にあつて、戦争中も日常は淡々と営まれ、戦争によって日常が切断されることはなかった。「政治より生活の幅は常に大きい」が意味するところを根底に置きながら、戦時下の国内社会・国民生活を紙芝居脚本から描き出すと同時に、戦時下紙芝居の用語使用の慣性ともいべき性格についても考えていきたい。

以下、前号までと同様、文中に「カギカッコ」で引用する紙芝居脚本はイタリック体・現代仮名遣いに改め、採録用語は太字とし、出現回数の引用符〈3回以上〉《3回未満》は省略する。

① [20/銃後生活、銃後団体]

銃後 36、隣組（隣保班、町内会）17、常会（婦人常会）15、提灯（赤～、～行列）6、回覧板 5、少年団（少年戦士）3、大日本国防婦人会 3、大日本青少年団 2、託児所（隣組～、会員奉仕）2、婦人会（部）2、愛国婦人会 1、国防婦人会 1、女子青年団 1、青少年常会（月21日）1、大日本皇道歌会 1、日本文学報国会 1、万国婦人矯風会 1

[銃後生活、銃後団体]の括りのもとに採録した用語はこの17件である。ここから、戦争の最前線に対比される国内社会一般を表す用語であった〈銃後〉の使用例を紹介する。本来ならば〈隣組〉をはじめとする〈銃後〉組織についても個々に紹介すべきところであるが、多くは格別に新たな意味付けのない、脚本廻しに必要な組織・団体名の機械的引照であることを指摘するにとどめ、〈銃後〉の諸相を紹介することに重点を置くこととしたい。ただし〈隣組〉という組織が、1940年9月11日の内務省訓令「部落会町内会等整備要領（内務省訓令第17号）」（いわゆる隣組強化法）によって制度化され、戦時下における住民の動員や物資の供出、統制物の配給、防空活動などを行った組織であることを記しておかねばならない。また〈隣組〉を直接描いた作品として1941年8月刊行の『常會の手引』なる作品があり、メインの脚本構成が次のようなものであることも紹介してお

きたい。―「(隣組の心構え) まごころとまごころとの
融けあい、飾りもなければ曇りもない、つまりはひとつ
心に燃え上がる大和魂の塊なのです」「なごやかな常会
も実は大御心にこたえまつる万民翼賛の場なのです。そ
んなに儀式ばったことはいいませんが、遥拝、黙祷、誓
いその他のことでしつとりと心をひきしめておくのは
よいことです」「(常会の大きな務めは上意下達) 国策が
こうして徹底させられることが高度国防国家にとって
はぜひとも必要なのですし、国民の一人一人もまごつ
かずに忠義が尽くせるのです。その末尾は「常会なく
して生活なし」の「差し込み」と唱和によって閉じられ
ている。「常会なくして生活なし」「常会なくして村治なし
」といった類似のスローガンは、〈隣組〉という組織が有
する相互監視・同調圧力の象徴として機能した。そして、
太平洋戦争が始まると、「部落会、町内会の指導に関す
る件」(1942年8月14日閣議決定)により、部落会・
町内会の会長を大政翼賛会の世話役に、隣保班長・隣組
長を世話人とすることを決定し、臣道実践を推進する末
端体制が整備されていった。



図1 常会の手引

〈銃後〉の貯蓄報国

本紙芝居コレクションのなかで最も古い作品は、
1936年2月紙芝居刊行會刊『矢島揖子』守屋東著である。
これに続いて、戦時下紙芝居のなかでも比較的初期に属
する1939年刊行作品として、〈銃後〉における貯蓄奨
励を主題とするものが登場する。

“婦人こそは武器を持たぬ兵士、銃後の貯蓄は主婦の
手で”と謳う『母さん部隊長』1939.4―「男ばかりじゃ
戦えぬ、銃後の守りがあればこそ。貯蓄と節約がわがづ
とめ、家を富ませる国まもる」。「決死の出征必死の貯蓄」
“一心一億百億貯蓄”のスローガンが躍る『貯金爺さん』
1939.12―「うんと働いてうんと貯める、これがお爺さ
んの口癖だったのです。うんと働いてうんと貯める、こ
れこそ今の銃後国民の最も大きな愛国の道の一つであ
ると思います」の2作品である。

本コレクションの脚本中に〈銃後〉の用語が登場す
る最も早い例であり、日中戦争の全面化にともない戦費

の調達課題となり、国債の償還や軍需産業への融資を
円滑にするため国民的な貯金奨励運動が展開されたこ
とを背景とした作品である。ここにおける〈銃後〉の標
的は、家計を預かる家庭の主婦(母さん)と当時の庶民
意識に地続きの老人男性(「花咲爺さん」を連想させる)
であり、『母さん部隊長』における娘(春江)の結婚相
手の父の綽名は「貯金爺さん」であった。〈貯蓄報国〉
運動が拡大する1941年以降、観客の感情移入の対象と
なる紙芝居の登場人物もまた広がっていくが、それにつ
いては、本稿で別項を立てて紹介する。

〈銃後〉の女・子ども

戦前の兵役法によって兵役の義務を課された成人男
子を指す「壮丁(ソウテイ)」に対比的な言葉として、「女・
子ども」というフレーズ(生産的社会活動に従事しない
との意味を持たせた表現)があっただろう。戦時下紙芝
居において、生産にも兵役にも従事しない老人は、ある
いは日清・日露戦争の回想主体であり、あるいは息子
を出征させた老親であるが、しかし成人女性(母、妻、主
婦)と子どもには(―「女・子ども」が持つ語義的ニュ
アンスに関わらず)、〈銃後〉の主役として生活・精神両
面にわたる様々な役割が被せられていた。

中国戦線に赤紙で息子を送り出した老母が象徴する
のは、「銃後の守りを怠らぬ村の人々、婦人会の人達、
相助け、相励んで村のため国ため、前線勇士に後顧の憂
いがないよう一致協力勤めます」(『戦士の母』1941.6)
のように、村落共同体における住民の一体性である。一
方、都市部の主婦に対しては、婦人運動に携わっていた
作者・金子しげりによって「大東亜戦争の打ち続く戦果、
前線、銃後一体となって大東亜共栄圏の確立を目指して
邁進する秋、女のたてこもるお台所も又同じ戦いの場で
ある」(『戦時お臺所設計圖』1942.8)と主婦の意識改
革が説かれる。稲庭桂子の脚本になる『妻』1943.7は、
地域・家庭という生活・生存のための共同の場から離れ
て一人になった〈銃後〉の妻が、自らの自覚をさらに深
くする姿を描き出す―「(出征兵士の妻初子) 女は家庭
さえ護っていればいいという時代はもう過ぎたのだ。よ
き妻でありよき母でありそして同時に銃後の戦士でな
ければならぬ。真心こめて運ぶ一針一針は……私も戦っ
ていますと云う……初子の戦地の夫への叫びであり又
皇軍勇士達への銃後の力強い後押しでもあるのだ」。こ
れらは、成人女性(母、妻、主婦)に求められた戦時下
的社會意識のパターンイズを示す作品であり、戦時下紙
芝居における「母(女)性」の問題は、いずれ独立して
扱うべき課題であると考えている。

〈銃後〉の子どもについては、作品への登場の仕方や
創作目的がその年齢によって異なっている。「兵隊さん、
おかげで僕らも元気です。……僕らも大きくなったなら
ぎっと行きます、大陸へ。兵隊さんに負けないで、お家
の人に手伝ってぎっと銃後を守ります。これが僕らのち



かひです」(『ボクラノチカヒ』1942.1)。「(ペンギン)私は南極からはるばる来ましたペンギン鳥ですが、こうしてこの大会が盛んに開かれましたのも、日本の兵隊さんや銃後の人たちのお蔭だと思い、また元気でつよい日本少国民の顔を見て本当に頼母しく思いました」(『ドウブツタイクワイ』1944.6)。前者は国民学校教員の手になる日本教育紙芝居協会の募集作品(軍事保護教育紙芝居佳作第一席)、後者は1943年11月に東京で行われた大東亜会議を模したものであるが、いずれも、幼児または低学齢児童を対象にして、“兵隊さんのお蔭で守られている〈銃後〉”の自覚を促そうとする作品である。

〈銃後〉の慰問活動

〈銃後〉の子どもに課された社会活動として、傷痍軍人の慰問、戦地への慰問文・慰問袋の送付があった。慰問活動は、それ自体で本稿の基礎である脚本用語(本コレクション中14点を数える)として独立した紹介対象となる活動であるが、ここでは〈銃後〉と一体で登場している例を紹介するにとどめる。

傷痍軍人の社会復帰を主題とする『あかるい門出』1941.12は、子どもたちの慰問に心をほぐされ、「お蔭で洋服の仕事を憶えさせてもらいどうやら一人前の職人に。同じ病院にいた中もそれぞれ時計屋になったり床屋になったり……みんな元気で銃後の職場を守っております」と述懐する姿を描く。軍事保護院・恩賜財団軍人援護会推薦の『七つの石』1941.9は、「久しぶりに届いた慰問袋に部隊は湧き立つような騒ぎです。キャラメル、羊羹、缶詰、さては下駄、傘等、銃後の真心込めた慰問品の数々に部隊長も兵隊も全く子供のようになって大喜び」と描かれる戦地の部隊で、多くの慰問品のなかに、家が貧しく慰問品を用意できない少年が宮城前の石を入れて送った慰問袋を見つけて新たな感激を生むという作品である。そのなかには「この石には国民の歓声と涙が沁みています、無事帰還したら宮城前に返してください」との慰問文が付されており、兵士の出身社会層と〈銃後〉少年の家庭環境の貧しさが共振する物語として、第四回紙芝居コンクール等入賞を勝ち取っている。



図2 七つの石

〈銃後〉の思想戦

〈銃後〉の概念が、狭義の武力戦から総力戦の様相を濃くした第一次世界大戦を通じて浸透したものであることは、代表的戦時下文書の下記のような箇所に端的に表れている。―「世界大戦が進行するに従って兵器・弾薬・軍需資材等の甚だしき消耗は国内生産力の拡充を促して、戦線と銃後とが緊密に結合すると共に、外交戦・経済戦・思想戦・科学戦等が武力戦と一体となり、あらゆる国家活動が直接戦争に参加することとなった。かくて戦争は国家総力戦であり、戦線と銃後との別なく、国民全部が戦争に従事していることを如実に感ぜしめたのである」(文部省教学局『臣民の道』1941年7月)。国策紙芝居においても、〈銃後〉の思想戦に対する備え(防諜)が主題となる。慰問活動と同様、「防諜もの」もまた、独立した紹介対象となる活動であるが(本コレクション中6点を数える)、同じく〈銃後〉と一体で登場している例を紹介するにとどめる。

『スパイ御用心』1941.12―「防諜は外国の秘密線に対する国家防衛。日本はいま二つの戦線において戦っている。一つの戦線は武力線でありもう一つの戦線は秘密線……この秘密線の防衛こそ銃後国民に課せられた重大な任務であります」。『防諜戦士』1942.6―「前線で皇軍が赫々の戦果を上げている時、敵のスパイ攻撃は銃後に向かって、諜報、宣伝、謀略、大体この三つの手段で攻撃してきます」のように、武力の前線に対比された〈銃後〉の秘密線(諜報、宣伝、謀略活動)の戦いが、現代的戦争への心理的備えとして描かれる。

前線と〈銃後〉の一体化

日中戦争から「大東亜戦争」へと突き進むなかで、〈銃後〉社会に突き付けられた報国・奉仕活動は、「貯蓄報国」「勤労奉仕」「食糧増産」「生活改善」「慰問」「軍人援護」「防空・防諜」と、社会生活の多方面に及んでいった。しかし、戦争の長期化にともなう戦病死者の増大、配給機構の硬直、食糧難の慢性化、本土空襲・空爆の日常化などが必然的に生み出す国民的な厭戦心理を、「鬼畜米英への敵愾心」「国民生活の明朗化」の揚言のみで解消することはもとより困難であった。膠着事態に直面した政府・軍部が採るのは世論指導の先鋭化である。1943年6月28日閣議了解『大東亜戦争ノ現段階ニ即応スル輿論指導方針(案)』で申し合わされた方針は、(要約すると)「1.戦争の大義名分をより明確にして実践上の不足を自省させる」「2.緒戦の勝利に樂觀せず各人日々の異常なる努力を結集する」「3.戦局に惑わされず試練を甘受する精神を鍛える」「4.不利な事態があっても戦意高揚、生産増強、戦争生活の確立に努める」「5.敵の苦悩・弱点を暴露するとともに油断を警戒する」「6.共栄圏建設の前途に希望を抱かせ勝利まで苦難に耐えさせる」「7.国土防衛を強調し物心両面の備えを固めさせる」というものであった。大東亜戦争初期の“聖戦の

大義”の唱導や、“健全明朗なる士気昂揚”に重点を置いた積極面が後退し、国民への不信と出口の不透明さだけが目立つ内攻の指導（方針とも言えないもの）となっていることが見て取れよう。

政府の公式指導と時期はやや前後するが、戦時下紙芝居においても、より一層厳しい前線（戦線）との対比によって、前線と一体化した〈銃後〉そのものの精神的備えを強調する表現類型が現れてくる。

『産業報国』1941.10は、新東亜建設という使命実現のために戦う大日本帝国が荒波に逆らう姿を「矢は弦を離れた。選ばれたる祖国日本、ねらいに間違いはない、ただこれをよく射抜くか否かは弓の力で決まる。軍人は矢だ、銃後は弓だ」と描き、銃後産業を真に戦時体制とすべく事業一家、職分奉公、公益優先の精神の確立を訴える。大政翼賛會宣傳部作『進め一億、火の玉父さん』1942.2—「(決戦の歌「進め一億火の玉だ」に続いて) そうだ一億火の玉だ、ひとりひとりが決死隊、がっちり組んだこの腕で、護る銃後は鉄壁だ、何が何でもやり抜くぞ!」、また選挙粛正中央聯盟編『大建設』1942.3—「総力戦の今日では最早戦線銃後という言葉もあってはならぬのです。すべては一体、油断は大敵……兜をしめた一億国民の総進撃」の2作品は官制プロパガンダの典型を示していよう。さらに脚本の過激化をとまなう前線と〈銃後〉の区別なき一体化を訴える作品『撃ちてしまむ』1943.3が続く—「(今や有史以来の国難) 全国民の一人々が全てを捧げ盡くして、ただまっしぐらに米英撃滅に突進するときである。二千六百余年に亘って養ってきたすべてをこの一戦に打ち込み、前線も銃後もなくひとすじに戦い抜くときである」。1944年初めの東部ニューギニア戦線(屏風山陣地を巡るラム河谷の戦い)を描いた『忠霊陣地』1944.6—「(土木中隊長の伝言) 土木は屏風台陣地を死場所と定めました。皇軍の名誉にかけて土木中隊は立派に戦いました。土木は信じます。一、神州は不滅なり、一、皇軍は必ず勝つ、一、前線に続く銃後の人々を信ず、以上。」は、死に臨んだ激戦地で後に続く〈銃後〉への信を託す作品である。1944年2月のマーシャル諸島・クェゼリン環礁の戦いを背景とした『我は何をなすべきか』1944.10—「前線の将兵は刀を持つ腕、銃後は身体だ……一機でも多くの飛行機を!一発でも多くの弾丸を!と腕から要求される様な身体では到底総力戦に勝つことはできない」からは、前線・〈銃後〉一体となった総力戦渦中の悲鳴を聞くことができる。

もう一つ最後に紹介するのは、遑って日米開戦直前の作品であり、登場人物の村長が偶然乗り合わせた軍人中尉の一粒もお米を残さず弁当をつかう作法に感心する場面である。「この戦地でいまこんな立派なお米が食べられるのは、全く銃後国民のお蔭である。代用食、外国米で頑張っている銃後国民の忍苦の生活があればこそ、こんな立派なお米が食べられるのだ。……そ



図3 『進め一億、火の玉父さん』

の銃後の心を思えばこの握り飯に感謝しないうちは食べられないではないか」(『お米と兵隊』1941.9)。このような挿話を一幅の「美談」として提供する(受取る)倫理的感性は、前線と〈銃後〉双方が合わせ鏡のように映し出す日本社会の貧困を自らのうちで昇華する思考停止(それを求める閉ざされた社会的強権)と表裏をなしていたというべきであろう。

以上、戦時下紙芝居に登場する〈銃後〉なる用語の使用例を見てきた。〈銃後〉をタイトルに冠する日本近代文学作品には、日露戦争を背景とした櫻井忠温『銃後』(1913年)があり、大国ロシアとの一年半に及ぶ戦争が、延べ100万の兵を動員した国内社会にも大きな影響を及ぼしたことを描いている。しかし、労作『国防婦人会』の著者でもある藤井忠俊は、現役兵の徴集と予備役などの召集を区別しながら、日中戦争の拡大にとまなう召集兵の出征風景が日本社会をあげての盛大なイベント化していったことを「赤紙の祭」と呼び、「この時(出征歓送式)から『銃後』が形成される。(略)この日から出征軍人、出征遺家族に対する村の関係と役割が成立し、国家の指導のもとに銃後世界が形成されることになる」(『兵たちの戦争:手紙・日記・体験記を読み解く』朝日選書、2000.12.25、p12-13)と、昭和前期に〈銃後〉社会が全面的に形成されていったことを指摘している。広島宇品港とともに、満州・上海に向けての大部隊出征の拠点港であった大阪港の近くに住む主婦らが、出征兵士や応召のため帰郷する若者に湯茶を振る舞ったのが活動の原点といわれる大阪国防婦人会(後の大日本国防婦人会)の誕生は、1932年3月であった(藤井『国防婦人会:日の丸とカップウ着』岩波新書、1985.4.19、p36)。紙芝居もまた、1938年8月に設立された日本教育紙芝居協会のもとで、〈銃後〉を描く大衆メディアとして国策に深く関与していくのである。戦時紙芝居が描く「貯蓄報国、勤労奉仕、食糧増産、生活改善、慰問、軍人援護、防空・防諜」がそれであるが、いくつかの紙芝居は、先に触れた政府の『輿論指導方針』を裏返した〈銃後〉社会の疲弊をもまた、巧まらずに描き出しているといえよう。



② [21/ 動員・奉仕・生活改善]

次に紹介するのは、戦時体制への編成のなかでも、「貯蓄報国、生活改善」といった国民生活に広く、等しく関わる事項である。採録件数は下記の31件であり、既に紹介した国内社会一般を表す〈銃後〉の使用例と一部重なるところもあるが、このなかで最も登場回数の多い〈貯金、貯蓄報国〉の脚本使用例を取り上げていきたい。

貯金（貯蓄、貯蓄報国、共同貯金、通帳、郵便貯金、落葉貯金、国体貯金）21、勤労奉仕（報国）8、国債（支那事变国債）8、闇取引6、人手不足（労働力不足）6、貯金額（135億、170億、100億）5、代用食4、買い溜め、売り惜しみ4、物資不足4、ラジオ体操3、切符制3、日記3、配給3、保険（金）、年金3、供出2、家畜愛護（動物愛護）1、軍需インフレ1、結核菌1、現用品1、公定値段1、国民服1、産児制限1、清掃奉仕1、体位向上1、貯蓄組合1、乃木式火鉢1、不急品1、不用品1、物資節約（贅沢、享楽）1、保健所（健康相談所）1

これまでの連載でも述べたように、日中戦争の拡大にともない、第一次近衛内閣は国民の戦意高揚を図るために「国民精神総動員実施要綱」を定め（1937年8月24日閣議決定）、総力戦体制の整備に着手する。同年10月内閣の外郭団体として国民精神総動員中央連盟を結成、町村長会・在郷軍人会・婦人団体・青少年産業団体などを組織化し、地方知事を核に実行委員会がつくられた。このような組織整備とともに、10月に「精神総動員強調週間」、11月に「国民精神作興週間」、1938年2月に「肇国精神強調週間」が発案され、軍事講演、神社参拝、教育勅語の奉読、出征兵士の歓送、軍人遺家族慰問、戦没者慰霊祭、柔剣道・ラジオ体操の奨励などが半ば強制的に行われた。1938年2月には「愛国公債購入運動」、6月には「貯蓄報国強調週間」、7月には「一戸一品献納運動」が実施され、初期の精神運動から次第に戦時経済への協力運動へと変化していく。国民精神総動員運動の開始と並行して、第72臨時議会（1937年9月4日～9月8日）において、「輸出入品等臨時措置法」「軍需工業動員法の適用に関する法律」などの統制立法が行われ、輸出入に関する物資の需給を統制し、軍需工場の管理を陸海軍の管理下に置くこととなった。また1937年9月10日には、事変（後に「大東亜戦争」）終結までを一会計年度とする「臨時軍事費特別会計法」を成立・公布させるが、その財源の大部分が公債に依存した戦時経済を維持するために、消費の節約、公債購入や貯蓄などの強化が求められ、総力戦を謳う国民精神総動員運動が始められることになるのである。

国民貯蓄運動〈貯蓄報国〉の原点となる政府決定は、「貯蓄奨励方針決定」（1938年4月19日閣議申合）に求められる。本方針は「今後発行せらるべき巨額なる国債の消化を図り且つ必要なる生産力拡充資金の供給を円滑ならしむるためには此際資本の蓄積を図るの要あり」と

して、「1. 従来行ってきた貯蓄のほか事変前からの所得増加分全部を出来る限り貯蓄に向ける、国民全般においても出来得る限り貯蓄を増加する」「2. 方法は確実なるものならば如何なる方法も可とする」「3. 今後一年間に増加を要する国民貯蓄の額は約八十億円程度を目標とする」「4. 貯蓄の大増加を要する理由や影響等につき徹底説明し国民の心よりの理解に基き協力を促進する」の4項目を国民貯蓄奨励方針として定めたものであった。

精神も、増産も、食料も、〈貯蓄報国〉も

まずは、本稿でも何度か登場する2作品を取り上げよう。『敵だ！倒すぞ米英を』1942.12—「石に齧りついてもやり抜こう。戦場精神だ！増産だ！貯蓄だ！一人一人が欲張っている場合ではない。大東亜が一つになって、日本中が火の玉になって、さあ誓おう、敵だ！倒すぞ米英を、一億の手で団結で」。『神機いたる』1944.11—「この秋（とき）われわれは皇軍の至妙なる作戦に絶対の信頼を寄せるとともに、皇軍をして十分なる戦果を収め聖戦を見事に勝ち抜くために必要な航空機の増産にその他の兵器に鉄に石炭に食糧にはた又貯蓄の増強に全身全力を打ち込もうではないか」。上意下達を旨とした国民精神総動員運動、その「発展形」としての大政翼賛会運動の傘下にあって、「精神運動も、飛行機増産も、食糧確保も、〈貯蓄報国〉も」と、国策紙芝居としての総華的な掛け声が見られる。

〈貯蓄報国〉の目標

一方、本コレクション中の紙芝居脚本には、当時の国民に求められた年間貯蓄額が具体的な金額で登場している。『母さん部隊長』1939.4—「日本が今年中に貯めねばならん金はね、皆で百億円。いいかね十円札で積むと富士山の二十倍以上になるんだよ」。『貯金爺さん』1939.12—「（公会堂で開かれた貯蓄報国の区民大会の演壇に張られた垂れ幕）貯蓄報国、一人残らず貯蓄しよう、一〇〇億を突破しよう」。『仲よし貯金』1941.4—「この調子なら百三十五億円もなんのそのと仲よし隣組はニコニコと申し合せたのでした」。『草鞋長者』1941.7



図4 母さん部隊長

—「(茂平) 百三十五億円を今年中に貯金する。一人当たり百三十五円はなかなか苦労じゃが……日本の国始まって以来の大戦争。『少年戦士』1941.11—「(学校の先生が叔父の魚屋で働く少年に) 今年は百七十億貯蓄しましょう」。

1938年10月に初版が刊行された『貯金爺さん』に関しては、改定版発行の際に修正が加えられたことを示す当時の資料がある。—「国策第二巻貯金爺さんは品切絶版に致しましたにつき、国策の新規申込の方々には『母さん部隊長』を代りに致す(*頒布：筆者注) ことと致しました。尚既に御所持の方は例の貯蓄八十億が今年度は百億になりましたから、その旨御訂正の辞をお加へ下さるやう願ひます」(日本教育紙芝居協会『教育紙芝居』2巻第5号、1939年5月1日、p13) というものである。多くの書き込みがある本センター所蔵の第三次改訂版『貯金爺さん』1939.12.10では、場面11の絵場面が上記のように「100億を突破しよう」と差し替えられている。

これらの紙芝居の刊行年と政府の会計年度を同一と見た場合、貯蓄目標額は〈1939年：100億、1941年：135億または170億〉であるが、上記「貯蓄奨励方針」(1938年：80億) 決定後の全体像はどのようなものであったのか(—1941年に刊行された堀尾勉脚本『少年戦士』の当該箇所にも白色絵具を塗った訂正が施されている理由を含めて)、当時の状況を見ておきたい。

当時の政府文書を参照すると各年度の国民貯蓄目標額(ないし貯蓄資金蓄積額)は、〈1939年：105億、1940年：124億、1941年：166億、1942年：230億、1943年：270億、1944年：410億〉であり、6年間の合計は1305億となっている。資料の典拠は、1939～1941年「資金統制計画綱領」(国立国会図書館)、1942年「百二十億貯蓄強調週間ニ関スル件国民貯蓄奨励局長官通牒」(国立公文書館アジア歴史資料センター)、1943年「270億貯蓄達成特別計画に関する件」(同)、1944年「国民貯蓄新目標閣議決定」(国立国会図書館)にもとづく。これらの数値が、紙芝居に示されている目標額とほぼ合致することを確認できると同時に、1941年については日米開戦に備えて当初の135億が11月に170億に変更された(「日本の戦時債券」<http://www7b.biglobe.ne.jp/~bokujin/saiken/index.html>) ことを受けて、上にあげた堀尾勉『少年戦士』1941.11の脚本もまた(一時期は明確でないが、恐らくは135億から170億に) 修正が施されたことが推測される。1944年の上記「国民貯蓄新目標閣議決定」に、目標額の変更は昭和16年度に次いで今回が2回目との記述があることもこれを裏付けるものであろう。

なお、日本教育紙芝居協会『教育紙芝居』には、上記の貯蓄目標額「1942年：230億、1943年：270億」に対応するものとして、「通信省、大蔵省、大政翼賛会主催 二百三十億完遂郵便貯金強調運動への紙芝居の

活用」の囲み記事(6巻第2号、1943年2月10日、p73)が、また「新たに二百七十億へ貯蓄への大進撃が始まったことに伴う紙芝居奉公」を訴える巻頭言(6巻第4号、1943年4月10日、p1)がある。しかし、政府の貯蓄目標額に直接的に呼応したいわゆる「勤儉貯蓄」ものが創作されたのは1941年までであり、太平洋戦争の開始とともに、国民の関心が「前線」の戦局に向かって拡散していくのは必然であった。

〈貯蓄報国〉の諸相

日中・太平洋戦争の戦費総額は約7559億円、臨時軍事費特別会計の歳出決算額は約1553億円(『国史大事典』吉川弘文館、1984.2.1、p1011)であったとされている。1937年日中戦争開戦時の国家予算(一般会計)約28億円/国民総生産約228億円、1941年日米開戦時のそれぞれ約69億円/約449億円に対する戦費総額の膨大さとともに、戦費に占める国民貯蓄目標額の高さが分かる。(現在の貨幣価値はその約800倍程度といわれる)。それでは、この国民的運動の末端の姿は如何なるものであったのか、紙芝居に描かれている〈貯蓄報国〉の足下を見てみよう。

代表的な児童向け紙芝居『フクチャントチョコキン』1940.11は、隣の部屋のお爺さんから支那事変の話を聞いた子どもが「戦争には軍艦や飛行機やたまを造るのにお金がとてもいる、それには日本のみんなが心を合わせ、一億一心貯金をして。お国のためお役にたてなければならぬと云う話でした」と竹筒貯金を始め、支那事変国債を購入する物語である。『オモチャの出征』1942.3では、他のオモチャに比べて目立って役に立てなかったポストのオモチャが貯金で腹を膨らませ「ハッハッハ私の本当のお役目はこれからですよ、ただのポストではありません、之でもれっきとした貯金箱です、ハッハッハやっとお役に立ちますよ。……みなさんは戦争だ、私は一生懸命貯金だ、みなさんは銃後の守りだ、オモチャの国万歳万歳」と演説する。貯金局指導の作品『コガニノシャシャウサン』1942.5では、郵便局行の汽車に乗ろうとする蜂が「ええええ働いていますとも。ごらんのとおり一生懸命蜜を貯めるのですよ。ぼくたちの仲間はみんな元気で働いてどっさり貯金をしているのですよ。今日はとなり組の貯金に行くのですよ」と語るのに続けて、「働く蜂は国体貯金、せいだす蟻は積立貯金、まじめな小熊は定額貯金、ぼくたちもまじめで元気なしょうわの子」と“貯金(チョコキン)”の擬音に合わせて唱和し、観客であった幼児を無抵抗な複数形の渦(ぼくたちしょうわの子)に巻き込んでいく。

健気な少年達(国民学校生徒)も、タイトルも勇ましく登場する。『翼賛少年』1941.10では「(太郎) 大丈夫だよ僕にも勤労奉仕させてよ、(三郎) そんなら来てくれ給え、でもお駄賃は安いんだよ、日曜には姉さんから特別のお駄賃が出るんだ、僕はそれを愉しみにしてい



も貯金箱に入れてるんだ」と、金持ちの息子太郎と農家の息子三郎の交流が〈貯金〉を題材に描かれる。先に一部紹介した『少年戦士』1941.11では、叔父の魚屋を手伝う銃後の少年戦士（完治）が「月給をもらおうと先ずその一割を貯金していた。一年何カ月そのお金も三十円近くになっている」と170億の貯蓄目標に協力する。東北の山村を背景にした『ラッパ貯金』1941.12では「町に向いながら）ねえ組長これで幾何になるかしら？さあ、とに角帰りは君、貯金通帳だよ、愉快だなア」と、集団登校に必要なラッパを購入するために、魚の下に敷く朴の葉を拾い集めてラッパ購入貯金会名義の郵便貯金をする少年たちが主人公である。タイトルの勇ましさに比して、少年達にお仕着せられた貯蓄行動の形容し難い平凡さが目立つ作品である。

〈貯蓄報国〉に登場する大人たちは、その居住環境や各自が抱えた生活背景が意識的に細かい書割のなかで描かれている。『尊き一銭』1941.12は、三重・松坂の本居神社を中心とした信心深い地域住民のなかで目立って酒好きの人夫亀吉が、隣組長からの日掛貯金の勧誘に反抗する場面が描かれる—「（隣組長）貯金と言っても日掛だし、隣組でまとめておけば毎日信用組合で集金に来てくれるし手間はかからないんだ。（亀吉）日掛だかひなしだか知らないが、俺らに貯金が出来りゃお天道様が西から出らア。冗談じゃねえ。（隣組長）だまされたと思ってやってみな、それも一日一銭だ、どうだえ？」。末尾は、息子の甲斐甲斐しい行動を見て一日二十銭の日掛貯金をするようになる人夫の改心物語である。『父』1942.8は、10年前に妻を亡くした町の印刷屋に勤続20年の律儀な職工（父）、兄は戦地にあり、弟豊は長年の印刷工としての過労で失明した父を残して出征することを心配するが、父は蓄えがあるから心配せずに国への奉公を勧める場面を描く—「今から20年前のことだ、郵便年金に入らないかと勧められたが、わしは断った。するとその時だよ、母さんが、大きくなった子供たちのつとめの邪魔にならないように入っておいてくださいと言った、これがその年金証書だよ」。隣組からの債券購入割当てに困った若夫婦が田舎の兄を頼る物語—『神様の配給』1943.3では、神様の配給（子供）がない夫婦が「それより前にお米や砂糖の配給がよけいにならないと困りますよ」というのに対して「（子沢山の兄が）わしらは子どもたちに一万円貯金を始めたのだが、お前たちも子どもが生まれたら記念に始めろよ」と〈貯蓄報国〉を勧める。「10人のこども一人につき月1円、100年積立てると元金1200円が10000円になる」「大東亜戦争も百年、大東亜建設も百年」と戦争に絡めた遠大な庶民の夢物語が描かれている。

1940年9月には内務省布告「部落会町内会等整備要領」にもとづき、国民総動員実践運動の末端組織として町内会・部落会・隣組の整備が進められた。戦時国民動員の一つであった貯蓄増強運動は、常会の徹底事項の一

つでもあり、各部落には「国民貯蓄組合」（一作品『妻』稲庭桂子脚本1943.7にも登場する）を組織させ、部落長には貯蓄の現況報告を義務付けその目標達成に努めさせた。こうして日本中の隅々から集められた国民の貯金・債権の実績額は未把握であるが、敗戦後のハイパー・インフレ（1945年10月～1949年4月、3年6か月間の消費者物価指数は約100倍）で国債は紙屑同然となり、国の借金（松本崇『持たざる国への道』中公文庫、2013.7.25によれば公債残高1408億円・政府保証の民間債務960億円）を帳消しにした。

③ [17/ 生産・食料・資源]

1940年7月22日に発足した第二次近衛内閣は、組閣直後に決定した「基本国策要綱」（7月26日）および「世界情勢ノ推移ニ伴フ時局処理要綱」（7月27日）にもとづいて、日独伊三国軍事同盟に調印（9月27日）し、南方進出と対英米戦争の準備に進んでいった。同年10月12日には近衛新体制運動の帰結となる大政翼賛会を発足させ、各種団体報国会、翼賛壮年団などの既成組織を傘下に収め、ファッショ的国民運動組織を完成させていく。11月23日には労働組合を傘下に収めた大日本産業報国会を結成して、内務省・厚生省の指導の下で労働者を戦時体制に統合した。（なお農民はすでに1938年11月20日結成の農業報国会に皇国農民として統合されていた。産業報国会は1942年5月には大政翼賛会の監督下に入った）。10月から翌年5月にかけては、「国家総動員法」（1938年4月1日布告）を根拠とする各種統制令の再編成、「勤労新体制確立要綱」（11月8日）、「経済新体制確立要綱」（12月7日）、「人口政策確立要綱」（1941年1月22日）、「科学技術新体制確立要綱」（5月27日）など、各分野の統制政策が次々と立案・実施される。「勤労新体制確立要綱」においては「勤労は皇国民の奉仕活動として其の国家性、人格性、生産性を一体的に高度に具現すべきものとす、従つて勤労は皇国に対する皇国民の責任たると共に榮譽たるべきこと」といった国家帰一的な労働観・勤労観が打ち出されている。「経済」「人口」「科学技術」の各要綱に共通して示されているのは「高度国防国家の完成」であり、それに向けた「自給自足の経済体制の確立」「兵力および労力の確保」「科学技術の国家総力戦体制の確立」であった。日米開戦前の時点において、GNPで13倍、石油生産量で721倍（森本忠夫『マクロ経営学から見た太平洋戦争』PHP新書、2005.8.31、p85、p401）、鉄鋼生産量で24倍（斉藤充功『昭和史発掘：開戦通告はなぜ遅れたか』新潮新書、2004.7.20、p119）というアメリカとの圧倒的な国力差に対する現実認識から、短期決戦・ドイツのヨーロッパでの勝利に期待した米世論の戦意喪失による早期講和と、南方資源帯の確保による長期持久体制確立という基本的な戦争方針の揺らぎを政府・軍部内に孕みながら、真珠湾攻撃からミッドウエー海戦へと突入していく。

一方、国民生活に関しては、物不足に対する消費規制が拡大強化されていった。1940年5月に始まっていた砂糖・マッチの配給切符制は、1941年4月には生活必需物資統制令の公布によって米・鮮魚貝類・畜産物・薬品など全生活必需品に拡大する。6大都市（東京・横浜・名古屋・京都・大阪・神戸）では米穀配給通帳制と外食券制が実施され、米の配給量は一人一日当たり2合3勺—それ以前の全国サラリーマン世帯一人当たりの米の消費量は3合一となった。1942年1月からは全国主要都市での味噌・醤油等の通帳による割当配給制、衣料品総合切符制が実施され、衣料品はこの切符がないと購入することができなくなった。絶対的な物資不足という社会事情を隠蔽する国策標語「欲しがりません勝つまでは」が、1942年11月に大政翼賛会・新聞社が募集した「大東亜戦争一周年・国民決意の標語」の入選作となった。1944年頃の写真には、空閑地（公園、運動場、校庭、河川敷、競馬場、ゴルフ場、路側等）を利用した芋・南瓜の栽培や淡水魚の養殖を勧める記事が見られように、国民は聖戦の継続と生活の維持の狭間のなかで危機的日常に立たされた。



図5-1 朝日ニュース紙芝居昭和15年第5輯（撮影10.20）



図5-2 写真週報第278号、1943.6.30

この時期の国策紙芝居には、このような日米の経済格差の挽回、近代戦に占める科学・航空機の比重増大、石油を中心とした資源確保、国民食糧増産といった掛け声に対応するかのよう、[生産・食料・資源]の諸課題に関わる用語が登場する。

工場22、水田、米16、食糧増産10、科学（する）、科学知識、科学日本、科学戦、技術8、金（金属）売買、収集、金属回収令、銅鉄回収、ボーキサイト、錫、ニッケル、補助貨回収8、職域奉公、職分奉公、職場は戦場8、電気（発電、電池、蓄電池）4、ゴム3、工具3、少年工3、石油、石炭3、産業戦士2、産業組合（精神）2、産業報国（の歌）2、職工2、生産力（工業力）、増産2、発明2、アルミニウム1、救恤米1、国産（純国産）1、商業報国隊1、争議（労働、小作）1、非常時食料1

脚本から採録したのは上記の23件であり、このなかから最も登場回数の多い、また生産と生活の現場を表しているであろう〈工場〉およびその関連用語について、紙芝居脚本の使用例を紹介する。

身近な人々の〈工場〉

まず紙芝居に登場するのは、脚本中の身近な人物の現在の職場が（農業でも事務・サービス業でも無論なく）〈工場〉であることを示すものであった。

『母さん部隊長』1939.4—「（叔母に縁談を勧められている娘春江と友人の会話）そのことで叔母さんがくるの。どんな方？工場にいる人、戦争に行行って今度帰ってきたの。とってもまじめでコチコチらしいのよ。わたしちゃんばだったらいやだと思わうわ」には、日米開戦前の庶民的な気楽な空気さえうかがえる。『乙女橋』1941.8—「（お加代ちゃんが帰ってくる）え？あの工場へ出ていたお加代ちゃんがかい？」、「麦あげ」1943.2—「（兄弟夫婦が守る実家へ帰省する兄弟）二人の兄弟はこうして町の工場生活から久しぶりに懐かしい我が家の敷居をまたぐのです」は、どこかの〈工場〉に働きの出ていた10代後半の女性や農家の次男・三男の一時帰省を物語の導入として描く。太平洋戦争下で行われた唯一の国政選挙を描く『一票を護る』1941.8—「（翼賛選挙に備えて）息子の一郎君は軍需工場の技師だけになかなかのハリキリ方である」、小磯昭内閣の軍需大臣をつとめ製紙王の異名を持つ藤原銀次郎原作『日本工具』1944.10—「（社長に呼び出された栗原信吉）栗原、君はこの工場に入ってもう年々になるのかね？十六の春からかれこれ十五年になります」になると、〈工場〉に勤めていること自体にある種の社会的陶冶やステータスが間接的に含意される。そして、『峠』1945.7—「僕はね、ついこの間まで東京に住んでいたんだよ、僕のお父さんは出征して南方で戦っておられるし、お母さんは東京のある工場の寮の監督をしていらっしやるんだ」という東京から疎開してきた少年の独白や、『母の翼』



1944.3—「(徴用で横須賀へ働きに行く父を見送る) 少年卓三の家はあまり裕福でなかった。大工だった父は徴用に、三人の姉は戦う軍需工場へ、母は一人で家を守りつつ食糧増産にと、一家ことごとく勝ち抜くために一生懸命だった」のような作品は、主人公の少年と父(戦地、徴用)や母・姉(勤労働員)との家族関係を描く背景として〈工場〉を登場させている。

主題主義としての〈工場〉

国家総動員法が発令され、「1940年体制」とも呼ばれる総力戦のための統制経済体制に突入したこの時期、国家統制下の企業・工場においては、雇用と解雇(労働力移動)の制限、徴用工・学徒挺身隊・囚人・捕虜といった労働力の多様化とともに、集団主義的な増産運動が特徴的となる。紙芝居の描写が、産業報国会支部としての企業・工場に働く人々の普通の姿に到達し得ないのは、紙芝居創作者と企業・工場の現場との距離の遠さを示すところであるが、その一方で、雇用・就業機会として第二次産業(軍需工業製品の生産)が無視できないほど増加していたことを物語るものであろう。当時の有力な創作分野であった農村紙芝居と異なり、同時代的労働者・生活者の描写を不得意とした(むしろ放棄した)都市生活ものは、戦争の浮力を一方的に受けて、[生産・食料・資源]に係る主題主義的な作品の表層性を晒すことを余儀なくされた。都市を背景とした国策紙芝居は、〈工場〉における《生産力(工業力)、増産》〈職域奉公、職分奉公、職場は戦場〉を謳う以下のような作品群に、その突出した表現を見出すことになる。

既に〈貯蓄報国〉の項で一部を紹介した『神機いたる』1944.11—「(サイパン島の将兵の玉砕) この叫びの底から更にさらに燃え上げるのは、増産への死身の努力であった……いざ一億の鉢巻だ。皇軍をして十分なる戦果を収め聖戦を見事に勝ち抜くために必要な航空機の増産にその他の兵器に鉄に石炭に食糧にはた又貯蓄の増強に全身全力を打ち込もうではないか」。同じく銃後産業を真に戦時体制とすべく事業一家、職分奉公、公益優先の精神の確立を訴える『産業報国』1941.10—「職場で振うハンマーの一撃に心を込め、前線・銃後の気合がピッタリと合わねばならぬ。職場は戦場だ」。『撃ちてし止まむ』1943.3—「敵アメリカも必死となって生産力、工業力をあげて軍備の充実躍起となり、殊に飛行機と軍艦と輸送船に力を入れ……日本という国を粉微塵に押し潰してしまおうと血眼になっているのです」。『一億楠公』1944.10—「一億国民は“一億の楠公ここにあり”の大信念を以て、冷静に沈着にこの負けじ魂を己が職場に生かし、飛行機を船を前線へ送り、鉄や石炭や食料を増産し……大東亜戦争完全勝利のために火の玉となって総突撃するのだ」。これらは、職員・工員の身分秩序を超えた産業兵士の増産運動が、もっぱら「一億の鉢巻」「一億の楠公」といった復古的精神主義によって描かれ

ざるを得なかったことを示す作品群である。

《産業戦士》の飛行機〈工場〉

同時に、軍需産業の最先端であった飛行機の生産〈工場〉には、特別な眼差しが向けられている。航空機生産部門の従業者は「1930年にわずか9,000人にすぎなかったが、1944年2月には1,988,000人に増大した」(大原社研『日本労働年鑑特集版 太平洋戦争下の労働者状態』第四章労働人口の配置と構成)とされており、設備技術および労働力が航空機生産に集中されたことを物語っているであろう。

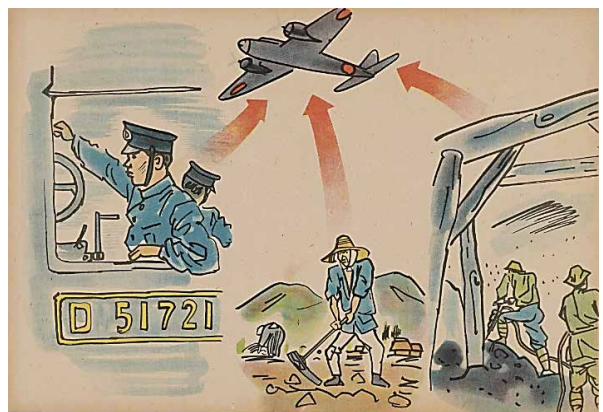


図6 我は何をなすべきか

〈銃後〉の子どもの項で取り上げた『ボクラノチカヒ』1942.1には、「(国民学校の一年生の台詞) 立川の工場に働いていた保君の兄さんが去年の秋戦争に行きました」と、作者(八王子国民学校教師)の近くにあった日立航空機株式会社立川工場が、さりげなく、しかし特権的に登場する。「後にく」と誓う少年の出征した兄の元・職場が飛行機〈工場〉であることに特別な意味が込められるのである。ニューギニア戦線で航空兵力の差によって玉砕を余儀なくされる『爪文字』1943.12には、「(藤田少尉の遺書) 最後に妹と弟たちに。新しい学業に就いてくれ。幸男は近眼がひどいから兵隊にはなれないだろう。それで姉さんと一緒に飛行機工場に入ってくれ」と、飛行機の増産が銃後の肉親に託される。本紙芝居コレクションのなかでは後期に属する1944年中盤以降の作品に、飛行機〈工場〉が増加し、生産従事者が《産業戦士》と称されるようになることも一つの特色である。国民学校を優等で卒業した三平君は「先生をお願いして望みがかなひ、明日町の飛行機工場へ」出発する(『お山の常會』1944.4)。秩父の山奥で代用食となる供出用かぼちゃをつくる老婆に出会った青年たち(飛行機をつくる《産業戦士》)からのお礼の手紙には「十機百機千機と僕達の工場から大空に向って飛び立って行く飛行機をごらんになったら、おばあさんそれが僕達のお礼の印だと思ってください」(『なんきんかぼちゃ』1944.6)とあらゆる機会をとらえて飛行機の増産が描かれる。『我は何をなすべきか』1944.10—「(大東亜戦争は日本の産業戦

士とアメリカの産業兵士との戦いともいえる) 世間では飛行機工場に働く者だけが飛行機を生産しているように誤解している者が少なくない。石炭を掘る鶴嘴戦士も実は飛行機を作っているのだ」は、増産物語の掉尾を飾る作品である。

1943 年後半からの中部太平洋の戦いにおいて航空兵力の圧倒的な差によって壊滅を余儀なくされつつあった日本軍は、その一方で、「一．(略)『マーシャル』方面の戦況に依り戦争の大勢が決められるべしとする如き極端なる表現を避けること」「二．『一機でも多く』等場合に依りては悲鳴と聞うる如き表現を乱用せざること」といった世論対策(情報局『『マーシャル』方面戦況に関する言論指導要領』1944 年 2 月 5 日、『資料日本現代史 13』大月書店、1980.7.22、p174)を打ち出しており、上記の作品からは、いみじくも、こうした政府・軍部の世論指導に敏感に反応する国策紙芝居の姿をもうかがうことができる。

少年少女の〈勤労奉仕〉と《少年工》たちの〈工場〉

「身近な人々の〈工場〉」で取り上げた『母の翼』1944.3 には、「徴用」で横須賀へ働きに行く父を見送る主人公の少年が描かれていた。また、不良工員の改心物語『進水式』19—には、「徴用は出征と同じことです、僕は村の人に万歳で送られてきました、徴用も立派なご奉公だと思います」と説く少年の姿がある。「徴用」とは、国家総動員法第 4 条に規定された勅令・国民徴用令(1939 年 7 月)の公布によって、国民の職業・年齢・性別を問わず国が行う総動員業務または政府が管理する工場や事業場などにおいて行う総動員業務に従事させる制度であり、徴用の動員令状は、軍隊の召集令状である「赤紙」に対して「白紙」と呼ばれていた。この「徴用」制度の背景には、日中戦争勃発から日米開戦にともなう青壮年男子(中堅労働者)の兵力動員、生産力拡充計画の遂行に伴う労働力需要、満州・北支那等外地への労働者供給の増加といった要因による著しい労働力不足があった。戦時色が色濃くなると、農村・工場などの労働力不足を補うために、女性と子どもまでも労働力として動員するようになっていく。

紙芝居にも少年少女の〈勤労奉仕〉とともに、工場に働く〈少年工〉を描く作品がある。『少年団』1942.1 では、「大東亜十億を導く日本の国民学校三年以上の皆さんは一人残らず少年団、テントも張れるしご飯も炊ける、地図も読めるし木にも登れる、どんな苦しい生活にでも決して負けない少年少女」「子供とはいっても皆さんはもう赤ん坊ではありません。日本がこれほどの難儀にあいながら毎日幸福に育てられ学ばされている、その感謝の気持ちをいろいろの勤労奉仕にあらわして下さい」と〈勤労奉仕〉が勧奨される。一方、『防諜戦士』1942.6 のように、「少年少女の勤労奉仕隊が活動している写真を撮って日本は労働力が不足して少年少女をか

り集め強制労働をやらせている」と、敵国のデマ宣伝に対するナイーブな警戒心理を描く作品もある。



図 7-1 少年団



図 7-2 防諜戦士

日露戦争に出征した老將軍のラジオ講話(職場向け放送)の形をとった『老將軍の放送』1941.8 では、「(ラジオ放送する大村閣下が或る田舎からの帰りのバスが故障したために)これは困ったと私は暮れかかった空を仰ぎました。どうしたらよいだろう? 思索しながら私は少年工の方を見ました」と「(一時帰省した息子の逗留が一日伸びたと喜ぶ母に)僕はどうしても明日の朝までに工場へ帰っていなければなりません。歩いて帰ります、非常時日本の若い者がたった二里八キロばかりを歩かないでどうします。それでも工場では僕がいないと機械がとまってしまうんです」「見習いでも持場は熱心に守るべきでしょう」と“感心な言葉”を返す見習い〈少年工〉が描かれる。『少年工と母』1942.8 では、手間賃の高い別の職場への誘いに一時心が迷い遅刻・欠勤した少年が、同僚の生き生きと働く姿を見て「仲間の少年工が自転車のペダルも軽く走っていくのです。そうだ、あの使いは今日僕がやる約束だった」と反省し、「飛行だってタンクだって軍艦でもみんなお前たちが作る一つの品物からできているんでしょう」という母の励ましに「今朝は僕が一番の早出だぞ、働け! 働け! 少年工なんだ。腕を磨いて早く立派な人になるんだ!」と決意を新たにす。『お山の常會』1944.4 では、〈少年工〉になる三



平少年を励ます山の動物たちの壮行会で「大東亜戦争は愈々決戦段階に入りました……僕はまだ子供ですが大人に負けてはいられません。僕は飛行機を一機でも多く一日でも早くつくるために一生懸命はたらくつもりです」と挨拶し、朝日に向かって「お～い、僕はねえ、三平はねえ、必ず日本一の少年工になるぞ、お山をはずかしめない日本一の少年工に」と叫ぶ姿を描いている。

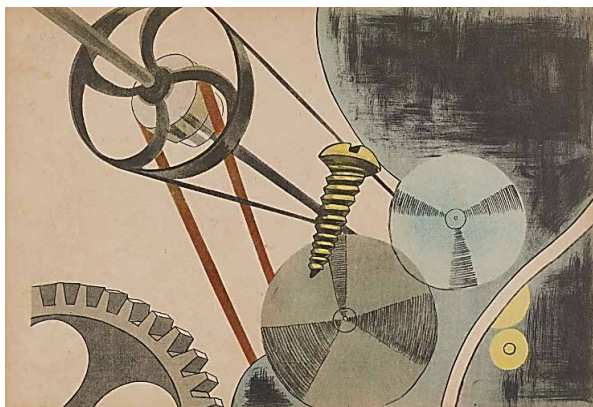


図8 少年工と母

ここに描かれた少年団に強制参加させられた少年少女の〈勤労奉仕〉は彼らの日常性そのものであった。「見習いでも僕がいなくて機械がとまる」という職場の自覚を持ち、あるいは「立派な、日本一の少年工になるんだ」とある種の社会的上昇を目指す少年の身分が、徴用工であったか、国民学校（1940年までは尋常小学校・高等小学校）卒業後の就業であったかは、脚本からは不明であるが、彼等が将来的に「職員」と区別される「工員」「職工」階層の予備軍であったことは確実である。しかし紙芝居にはまた、職業的・地位的差別を否定した国家動員も描かれる。『雛鷺の母』1944.11—「（孫を博士にしたいと思っている老人が孫の先生に）あんたは児童に一職工でも立派なものだと教えたそうですな、けしからん、教育は立身出世のためだ」「（先生）我が国教育はお国に役立つ国民を育てるための教育です、一兵士、一職工でも一将軍、一大臣でもみんな同じようにお国へ仕える一本道です。みんな天皇陛下のみ恵みを受けている有難い国民の一人一人です」。

少年少女の手下としての〈勤労奉仕〉〈少年工〉の姿や、地位・身分を超えた国家動員思想を描きながら、工場の現場では〈少年工〉の不良行為も課題となっていた。『富士見ゆる丘』1944.5には、不良〈少年工〉の錬成道場への入室と卒業が描かれる。両親を亡くし弟の成長を愉しんでいる姉が「近頃めっきり悪くなってきた弟」のことで「寒い冬の夕方、一人とぼとぼ弟達夫の働いている工場へ」呼び出され、主任から「工場の部品を盗んだり、新人の少年工をおどかしたり……少年道場に預けたほうがいい」と勧められる。旋盤見習いをやっていた弟は「富士山に見える関東少年道場」の耕作訓練などが面白くなく、班長（田代少年）の組が飼っていた鶏が死

ぬ事件の責任を班長に被せるが、落下傘工場に勤め始めた姉の手紙を読んで改心し、罪を告白、卒業後には造船所に勤め始める。

同時期の『写真週報』第267号「少年保護記念号」（1943年4月14日、p8）には次のような記事が掲載されている—「生産戦線に働く少年工の使命が今日ほど重大なときはない。（略）東京の工場におけるこれら少年工の割合は、最近の調査によると一工場平均が四十三パーセントであるが、新設工場などになるとぐっと率は高く八十パーセントを占めてるのが多い」「しかし最近、少年工の不良化が大きな社会問題としてとり上げられているが（略）、既にさきほどの次官会議でも少年工の不良化防止が討議され、更生施設、慰安施設の不十分なことが取上げられている」。この青少年の不良行為対策として、司法省は1943年1月20日「勤労青少年補導緊急対策要綱」を閣議決定し、一般勤労青少年、不良化した勤労青少年のほか、虞犯及犯罪青少年工に対しては「少年工の保護事件処理の周到・敏速・円滑化を図るために少年審判制度の運用を刷新強化する」「少年工の性情に応じて産業要員としての保護錬成の徹底を図る」「工場事業場の協力を促進する」など補導対策を講じるとともに、勤労青少年指導者に対しても「勤労青少年の補導訓練に関する責任を自覚せしむるとともに随時適当な錬成を行う」「中央及地方に勤労青少年補導組織を確立することなどを定めた。上記『週報』の記事は、本「対策要綱」決定を受けての国民向け広報であったと考えられるし、朝日新聞社員で日本教育紙芝居協会に勤めた永村（仁木）貞子の脚本になる『富士見ゆる丘』1944.5にも、不良〈少年工〉、少年道場、落下傘工場、造船所といった戦時下のアイテムをフルに駆使した国策団体としての速やかな呼応がうかがえるところであろう。

以上、今号では、脚本用語の分類〔17/ 生産・食料・資源、20/ 銃後生活、銃後団体、21/ 動員・奉仕・生活改善〕から脚本用例を取り上げることによって、国策紙芝居が描く戦時下の国内社会・国民生活の姿を紹介した。引き続き次号では、現実の社会関係を構成する組織や活動として、〔国内社会〕残りの用語分類〔18/ 交通・通信、メディア、19/ 教育、23/ 防諜、防空〕を対象とする予定である。

（続）